

「羊を食べない(?)インドネシア人」(2021年08月20日)

ライター: 文学者、F ラハルディ

ソース: 2014年5月17日付けコンパス紙 “Nasib Ternak Domba”

中央統計庁2013年データによれば、インドネシア全国の飼育羊は1,450万頭いる。たいへん大きい数字だが、飼育ヤギの1,850万頭よりは少ない。その羊の頭数は相当に大きいものだというのに、市場やスーパーマーケットで売られている羊肉をわたしは見たことがない。売られているのはヤギの肉ばかりだ。もちろん牛肉は別にしての話だ。羊肉のサテやグライもとんとお目にかかったことがない。売られているのは sate kambing や gulai kambing ばかりなのである。

インドネシアで飼育されている羊は食用肉にされたことがないのだろうか？家畜屠殺場では羊も定期的に屠殺され、皮革をはがれ、食肉等に処理されているのである。そのときに、羊肉がヤギ肉という名称に変化するのだ。つまり昔から、羊の肉はヤギ肉という名称で販売されていたということなのである。だからサテやグライになったときにもヤギ肉の一本やりになる。たとえ羊 domba の肉であっても sate domba や gulai domba と呼ばれることはなく、ヤギ kambing の名前を使った sate kambing や gulai kambing という名前で売られるのである。

ジャワ語では、wedhus というひとつの単語が domba も kambing も意味している。区別をする必要が起こった場合にだけ wedhus gembel と wedhus jowo という補足が行われる。つまりジャワ人にとっては羊もヤギの仲間であり、羊は縮れ毛(ゲンベル)のヤギということになる。ジャワ語のクロモではヤギを mendo または mendo jawi、羊は mendo gembel と呼んだ。

それらが屠殺場に入ってから肉になって出て来たときには、どちらも iwak wedhus あるいは ulam mendo という単一名称で呼ばれた。羊はジャワ語の中でユニークな名称を与えられたことがなく、その影響がインドネシア語の中にもたらされた結果が上のような現象になったのである。

羊を食べないインドネシア人

KBBIの kambing の項目には、ウシ亜目の草食動物、偶蹄目、角は空洞で、通常は肉・ミルク・時に毛を取るために家畜として飼育される、Capra、という説明が見られる。一方、domba の項目は、毛の厚い kambing(毛はウールの素材に使われる)、kambing kibas、という説明になっている。

KUBI(Kamus Umum Bahasa Indonesia)では kambing も domba ももっと簡単な説明になっている。

kambing: binatang sebangsa domba, ada banyak macamnya seperti kambing kacang, kambing benggala, kambing kibas, dsb.

domba: kambing kibas

KBBIとほぼ同様に、インドネシア百科事典でも説明は似たようなものだ。

kambing: ラテン語 Capra、ウシ亜目の動物、偶蹄目、角は空洞、首は短く額は前に出ている、鼻は平坦で平らな角は脇に伸びる、オスヤギはあごひげがある、植物を食べる、インドネシアの全土でたくさん飼育されている、一般に乳ヤギと肉ヤギの二種類が知られている。

domba: biri-biri、ウシ亜目に属す、小型飼育動物、別名 Gibas

インドネシア総合百科事典には、羊もヤギももっと詳しい説明が付されている。kambing (goat): 属 Capra 科 Bovidae、哺乳動物、ウシ亜目、角は空洞、domba と深い関係にある、ヤギは肉・乳・皮革のために飼育される、インドネシアにいる最も小型の種として kambing kacang、大型は耳が下まで垂れ下がっている kambing Etawah が知られている。domba または biri-biri (英語 sheep): 哺乳動物、ウシ亜目、属 Ovia 科 Bovidae、野生のものと家畜化されたものがある、domba は kambing とたいへん近い関係にある、違いは: 羊の角はらせん状であること、オス羊は臭くないこと、あごひげはオスヤギに似ている、羊は、柔らかいウール、肉、皮革を得るために飼育される。

Ovia の綴りは正確には Ovis であり、誤植と思われる。

KBBIはジャワ語辞典とKUBIだけを参照して語義を決めたように見える。インドネシア総合百

科事典には目が届かなかったようだ。ましてや、ウェブスターや大英百科には一瞥もくれなかったのだはないだろうか。

「闘う羊たち(1)」(2021年08月23日)

adu domba という言葉がある。adu ayam は闘鶏、adu anjing は闘犬、adu layang-layang は喧嘩凧。だから闘羊というのがその邦訳になるだろう。ところがKBBIには「融和している集団を分裂抗争させること」という意味が記されているだけで、「羊の喧嘩」の意味が書かれていない。

インドネシア史の書物を読むと、オランダ人はヌサンタラの諸王国をアドウンバして支配下に置いたといった表現がしばしば出現するので、KBBIは決して間違っているわけではないのだが、生きているオス羊が頭突きをし合って闘うことが第一義にされなかったのはどうしたことだろうか？西ジャワ地方では ngadu domba と呼ばれる闘羊の祭りが現実に催されているのである。

adu の語は「闘わせる」という意味の他に、「扇動する」「挑発する」という意味でもよく使われていて、「融和している集団の仲を裂いて、互いに争い合うようにけしかける」のがアドウンバであるというのも良く分かる。この表現に羊が取り上げられたのはやはり、「おとなしく群れている羊を互いに喧嘩させる」というイメージが意味とよくよくフィットしたからではないかという気がする。

だから adu domba という熟語は完全なる比喩表現だろう。なぜなら、大きな群れの羊たちがいくつかの集団に分かれて抗争し合うようなことは現実に起こらないからだ。闘う羊はオスだけであり、しかもボスの座を賭けて決闘するだけなのだから。



オス羊を一対一で戦わせる~ガドウンバの催しは、西ジャワ州ガルツ Garut が発祥地らしい。ガルツは今でもヌサンタラ有数の羊生産地になっている。事跡をたどると、1931~32年ごろにガルツ県チブルツ Cibuluh 村の広場で行われたところまでたどり着けるので、確信が持てるのはその時代にな

る。しかもっと古代からの催事という可能性を否定するものではない。西ジャワのひとつとは闘羊について、古い時代から祖先が行ってきた故事だと思っているひとが少なくないのだ。

1931年ごろから〜ガドゥンバはチブルツ村で毎週日曜日に開かれて、見物に来たひとつとは金を賭けて遊んだ。ところが1970年になって賭博が廃止されることになり、チャンピオン羊を選出してその羊と飼育者の名誉を世間に知ろ示す祭典という健全なスポーツ精神の催事に変化したのである。

日曜日になると朝8時から広場で試合が始まる。飼育者が精魂込めて育てたオス羊を連れてやってきて、試合は16時ごろまで続く。雨が降ると中止になる。また宗教上の祝日や独立記念日には開催されない。

〜ガドゥンバに登場する羊たちはメリノ種、アラブ半島やオーストラリアが原産の脂尾羊 *domba ekor gemuk*、プリアガンの地元種が掛け合わされたものだそうだ。尾が太く、そして毛と角はメリノ種で、更に精神がタフであるために環境の様子の変転におびえたりしない。その羊たちは闘羊用として飼育されている。闘鶏用のニワトリと同じだ。

当日、飼育者が連れて来た羊はクラス分けがなされ、同じクラスの羊の中で飼育者が相手を選ぶ。試合の順番が来ると、飼育者は愛羊を連れてアリーナに登場する。羊は相手を目にして既に闘志満々、すぐにでも相手に飛び掛かろうとするが、飼育者は審判が開始を宣言するまで羊の急所を押さえて自制させる。

試合開始が宣告されると、羊は相手に頭突きを食らわせようとして飛び掛かって行く。空中で互いの頭蓋骨が激しくぶつかり合うのだ。頭突きの最大回数はクラスによって違っているが、30回もの頭突きをすべて消化して、まだ決着が付かずに延長戦を、と言うケースはあまりないらしい。たいてい弱い方が逃げ腰になり、あるいは一目散に逃げだす羊もいて、誰が見ても勝敗は明らかというケースが多い。

審判は選手(つまり羊)が大けがをしないように最大限の配慮を払うものの、不幸にしてアリーナで死ぬ者が出ることもある。そうすると、羊はその場で解体されて、その肉はやって来たひとたちへのお持ち帰り品にされる。そしてその羊の飼育者には、実行委員会からそれに見合う金が支給されるという寸法だ。[続く]

「闘う羊たち(2)」(2021年08月24日)

西ジャワの州都バンドン市を取り巻いているバンドン県でも、闘羊の催しはよく行われている。ガルツ県から闘羊選手が飼育者に連れられてやってくるし、もちろん他県からも参加することができる。バンドン県でのこの催事は名称が異なり、ngadu domba と呼ばれないで kontes ketangkasan domba と呼ばれている。ngadu が持っているネガティブな使役的語感を避けたのかもしれない。羊の敏捷性コンテストという言葉とオス羊の決闘の姿が読者の脳裏でフィットしただろうか？

バンドン県で行われているこの健全な羊の決闘試合をスンダ人の中には、羊に乗り移った祖先の勇士の霊がその技と力を競っているのだと語るひともいる。ともあれ、小鳥や鶏の鳴き声コンテストと同じで、羊の敏捷性コンテストは羊に経済価値を与えることになるのだ。

試合の勝敗は自ずと決まって来るのだが、単に強いだけでは優れた羊と言われない。その姿が人間の目に感銘を与えるかどうか、もうひとつの要因を形成する。実力があって、しかも雄々しい姿をしていれば、言う事はなにもない。しかしどんなに強くても見た目に醜さがあれば、点数は割り引かれる。もちろん美醜については、各個人の持っている美醜の境界線を越えて美の区分に入った場合、個人の好みがそこに強く混じり込んでくるために、もっとも美しいという形容詞が一般性を持たないのは美女コンテストに見られる通りである。

その日の大会でコンテスト審査団がチャンピオンを決める。その評価基準は美醜・強弱・勇怯の三ポイントになっていて、相手を怖れて逃げた羊は評価のまな板に載らない。つまりチャンピオン

は審査団が勇強美を専門的見地から審査して決めるので、一般のひとびとにも強い説得性を持つものになる。

その評価に金銭的価値が付着するのだ。コンテストでチャンピオンになった羊の飼育者は羊と共に人気者になり、その羊を買いたいという声をさばくのに忙しくなる。

2021年のイドゥルアドハで都市部での小売価格が一頭2百万ルピアくらいした羊やヤギは、産地での卸価格は百万前後だろうと思われる。闘羊用の羊はもちろんそんな価格でないが、たとえ2~3倍だとしても、そのチャンピオン羊を買いたいという声は数千万ルピアを最初からオファーしてくるのである。~ガドゥンバが羊飼い仕事の強いインセンティブになっていることがそこから見えて来るだろう。

2012年6月のコンパス紙は、ガルツ県ランチャボゴ村住民の中で闘羊用の羊を飼育している者についてのルポを掲載した。アネッ・スティスナさん42歳は年齢3カ月の闘羊が3百万ルピアで売れたことを記者に語った。7~12カ月育てれば2倍で売れるのだそうだ。

売上3百万ルピアの原価は1百数十万ルピアだそうで、原価は餌と世話の費用で構成されている。メス羊は一度の出産で2頭を産む。一年以内にまたすぐ次の子供が生まれて来るから、商品在庫には困らない。この闘羊繁殖事業を始めたおかげでアネッさんはすべての借金を完済し、子供をすべて高校まで上げ、86平米の土地を自己所有にすることができた。

別の闘羊生産農家は1~3歳の闘羊を11頭持っていて、その資産としての総額は2千万ルピアだそうだ。それをもう数カ月間肥育してやれば、想定売上はその3~4倍になると述べている。



ガルツの羊は一般的に体重が65~70キロに達して身体が大きく、巨大な角が巻いて頭部を覆い、活動

的で敏捷に動き、しかもアグレッシブだ。他の土地にいる羊に比べて、見た目もエキゾチックであり、しかも性質がまるで別種の動物であるような印象を受ける。耳は小さくて4～8センチしかなく、尾も小さくて、イノシシの尾とかネズミの尾などと言われる。ガルツ羊の肉はうまいという評判だ。[続く]

「闘う羊たち(終)」(2021年08月26日)

ガルツ県海洋漁業畜産局畜産飼育課長によれば、2011年データでガルツ羊は 584,798 頭おり、一頭の平均体重60キロで25キロの肉と25キロの骨が獲れるとのことだ。肉は時価でキロ当たり6万ルピア、骨は3万ルピアとなっていた。需要は一日当たり最大で70トン、需要元はジャカルタとバンドン。

県商エコペラシ中小零細事業局の2011年データによれば、ガルツ羊の皮革生産量は21,700枚となっている。ただしサイズは無規格で枚数だけが数えられている。皮革はジャケット・バッグ・靴などに加工されており、ジャケットはマレーシア・シンガポール・日本に5千百枚が輸出されて258,651米ドルの輸出売上になった。

ガルツ県の皮革生産事業は1900年から始まった。業界者のひとは、皮革製品素材としての皮生産のために月間5千頭分のガルツ羊が必要だと述べている。ジャケット用には一着60～140万ルピア相当、バッグ用には一個40～150万ルピア相当の皮革が必要だそうだ。

闘羊がガルツ羊の専門だとするなら、闘羊でない羊はヌサンタラの至るところで飼われている。ほとんどが肥育用であり、農家の投資活動のひとつになっている。たとえば東ジャワ州では、たくさんの農家が脂尾羊種を最大でも30頭未満飼育している。たいていは空き地へ連れて行って放し飼いし、夜に家に連れて帰るという方法を執っている。羊は夜、農家の周囲で勝手に眠り、昼間

空き地で勝手に草を食べて太るという寸法だ。

脂尾羊は特に東ジャワ州内で高い人気を持っており、羊産の盛んなジョンバン・ボジョヌゴロ・トゥバン・ブリタル・パスルアン・ジュンブル Jember・バニユワギ Banyuwangi・マラン・ルマジヤンなどの諸県では東ジャワ特産の優良種だとコメントする関係者が多い。難点は種付の際に人間がメスの尾を持ってやる必要があるくらいのことだそう。

一般の農家が小規模で粗放的な飼育を行っているのに対して、よりビジネス効率の高い羊小屋飼育方式を行う農民もいる。ひとりの人間が50～100頭を世話することができるため投資額もコストも売上も大きいものになり、行政と産業界はこの方式をプロモートする傾向にある。この方式は大きい羊小屋を作って羊をその中で生活させ、朝夕濃縮餌を与えて太らせるスタイルだ。

羊は病気にかかりにくく、また一日中小屋の中にもおとなしくしていて争いを起こさないため、この飼育方式は資本効率がたいへん優れていると報告されている。50頭を肥育して8カ月間太らせれば、農家にとってはたいへん大きな補助収入になり、生活が大いに安定するという試算も出されている。

パスルアン県プリゲン郡で繁殖と肥育を手広く行っている農家では3百頭が飼育されている。繁殖用羊の購入は年齢や体重などを参照せず、パフォーマンスと姿で選択しているそう。何年もかけて経験を積んで来たから、羊の姿を見れば良いか悪いか分かるようになったとその事業主は物語っている。

ちょっと古いが2002年の州内飼育羊頭数は136万頭いて、年間2万頭が出荷されている。出荷は、生きているものと肉にされたものを含んだ数字で、わずかだが下降傾向が見られる。その数字は明らかに、在庫過多の様相を物語っている。羊生産者の話では、羊の需要が高まるのはイドゥルフイトリの後に起こるジャワの結婚シーズンとイドゥルアドハの時期のクルバン需要ばかりであり、その時期をはずれると需要の低迷が続くのだそう。

地元社会の生活習慣がそんなものであるなら、状況改善は外国への輸出だと考えるひとびとは少なくない。産業界も行政もがその必要性をひしひしと感じており、羊需要の大きい国はどこかを見渡すと、すぐ近くのマレーシア、そしてイドゥルアドハで莫大な需要が起こるサウディアラビアが目に入って来る。

マレーシアでは国内需要の93%がオーストラリアとフィリピンからの輸入で賄われており、マレーシアの羊生産者は頻繁にジャワを訪れて羊やヤギを買い付けているが、いかんせん、量的に大違いになっている。マレーシアの国内生産のための材料を輸出するよりも、消費需要を狙って製品供給をする方が良いに決まっている。

サウジアラビアも国内需要の大きい部分をオーストラリアとスペインからの輸入に頼っている。それらの市場に食い込もうと、インドネシアの羊たちは虎視眈々と狙いを定めている人間たちに抱かれている。[完]

「インドネシアのヤギたち(1)」(2021年08月27日)

中央統計庁公式データによれば、2020年の全国羊頭数は 17,769,084 で、西ジャワ州に 12,272,435 頭いる。一方のヤギは 19,096,381 頭で、最多は中部ジャワ州 4,060,681、次いで東ジャワ 3,624,229、ランブン 1,480,353、西ジャワ 1,353,798、他の諸州はどこも百万頭に満たない。ヤギの場合は全国のおよそ半分がジャワ島に集中している。

ジャワ島で一般的なのは、農家が農耕の副業としてヤギを飼う形態だ。農耕の一環で野菜を作れば、青物のくずができる。ヤギの飼料費用が大いに助かることになる。普通一般に、農家は子ヤギを購入して飼育し、大きくなったのを売却する。一軒の農家が飼うのは1~4頭くらいであり、東・中・西ジャワにいる頭数の大部分は農家に散らばっているのである。このジャワ島で飼育されているヤギの大半はジャワヤギ kambing jawa あるいは豆ヤギ kambing kacang と呼ばれている小型種だ。

農家の家畜飼育はたいていニワトリから始まる。卵が孵化すれば財産が増える。増えたニワトリを売って子ヤギを買う。ヤギを大きくして売却すると、次は牛や水牛の子供を買い、大きくして農耕作業の手伝いをさせ、年を取ったら売却する。そんな農民の蓄財サイクルの中にヤギがいるのだ。ヤギの飼育は金も手間暇もそんなにかからず、子供が世話している家庭も多い、と農民たちは言う。東ジャワ州にいるヤギの9割は農家の庭先で遊んでいる者たちで、資本を投下して大きい飼育ビジネスを行っている業者は指を折って数えられるくらいだそう。

ヤギや羊は一度に2~3頭が生まれ、しかも年齢の大小に関係なく買い手が簡単に付くため、繁殖も売買の回転も速い。問題は最終消費が小さいことで、通過儀礼の祝祭や宗教祭事の日に必要な需要が盛り上がりつつも、なかなか大量の日常消費は実現しない。

東ジャワ州シドアルジョ県の農家もヤギの飼育を盛んに行っている。ブドウラン郡サウォハン村では、各農家が個別に飼っていたヤギを一カ所に集めて飼育する方式に変えた。それまではたい

ていヤギを各家が周囲に放し飼いにして自由にさせていたから、ヤギが台所や屋内に入ったりするため、衛生上の問題を抱えていた。

村の外にある養魚池の堤防に近い場所の土地を地主から借りて、そこに内部を35に区切った大きいヤギ小屋を建てた。地代は年間100万ルピアだから、ヤギ飼育農家は一区画を借りるのに年間3万ルピアで済むのである。

村民のカマルさんはその日の朝、ひとりで共同ヤギ小屋にやってきた。まず小屋から10メートルほど離れた水路へ行ってバケツで水を汲み、自分の区画の飲み水桶を満たした。

次に区画の中を掃除し、糞やごみを集めて燃やす。それが終わると、自分のヤギ65頭を全員引き連れて、養魚池の向こう側にある草地に連れて行った。カマルさんの今日のヤギの世話はそれで終わりだ。ヤギたちはそれぞれが自由に動き回って草を食べ、日暮れになると自分で小屋に帰って眠る。ヤギが草を求めて歩く一日の行動半径は8～10キロくらい。ヤギがせっせと自分の腹を満たしている間、カマルさんも自分のための稼ぎに精を出せばよい。ヤギを飼っている村民はたいていひと月に1～2頭のヤギを売り、子供の学費と生活費にあてているそうだ。

ヤギの世話は健康状態を管理してやるのがメインになる。妊娠している者や病気にかかった者に注意しなければならない。よく起こるのは、生きたバツタを食べたあとに腹が膨れて来る病気だ。他のリスクには、子ヤギが養魚池に落ちて溺れたり、野犬に襲われて咬まれたりする事件もある。

[続く]

「インドネシアのヤギたち(2)」(2021年08月30日)

ヤギの飼育は最初、オスメス一対のヤギを購入して始まる。その後は飼料の購入をしないのだから、出費はない。ヤギ小屋を建てる必要が起こったときに、また出費が必要になるくらいだ。

一方、生後6か月を過ぎれば子ヤギは販売対象になるので、換金性が高い。価格はあまり変動せず安定しているが、イドゥルアドハのような需要期には値上がりする。ハイシーズンの小売価格は一頭で2～4百万ルピアの売値が付く。供給者側はひと月前から動きを開始し、飼育農家はその時期に7～10頭を売り渡して2～2.5千万ルピアの売上を手に入れる。

ヨグヤカルタ特別州でもヤギが農民の友であるのは変わらない。元々は乳牛の飼育が盛んだったこの地方で、農家の財形がヤギにまで広がって行ったということのようだ。この地方にはPEと呼ばれる種のヤギが多い。



PEとは *peranakan etawa* の頭字語で、プラナカンとは外国種と地元種の間でできた子供とその子孫を意味しており、インドネシア語の中で人間についても使われている。エタワとはインドから渡来した種であり、それと豆ヤギが交配されてPE

Eが形成された。

エタワ種は身体が大きく、耳が長く垂れ、角は短く、額と鼻が盛り上がっている。オスは体高127センチ体重91キロに達するが、メスは92センチ63キロ程度が最大だ。ミルクが一日に3リットルも採れるので、人気が高い。PEはエタワ種に似て身体が大きくなる。違いは毛色が二色になるのが大きい特徴だ。

エタワ種がインドネシアに導入されたのは19世紀で、オランダ人が乳ヤギとして輸入した。その後インドネシア人が肉ヤギとしての扱いの比重を増やしたために、現在は肉と乳の二本立てになっている。そう書くと、オランダ人はエタワヤギの肉を食べなかったと考えるひとが出現しそうだから、オランダ人も乳ヤギの働きができなくなった者の肉を食ったと付け加えておこう。

ところがエタワ種は食肉にできる部分が30%しかなく、インドネシア人が昔行ったエタワ種の肉ヤギオリエンテーションは効率の劣る方針だったと現代インドネシア人専門家は批評している。

ムラピ山南麓を占めているスレマン県が海拔の高い土地であるため、気温の低い方がPEの飼育に適していると考えられて、最初はスレマン県が推薦されていたが、州南海岸部のクロンプロゴ県やグヌンキドゥル県でもPEの飼育は問題なく進展していて、クロンプロゴで州内一番という優良ヤギが登場しており、その子種が東ジャワ州に供給されるような状況になっている。高地の方がよいというセオリーは既に神話の世界に入ったようだ。

州内のPE種の普及は学术界と行政のプロモートで動き出した。スレマン県チャンディビナグン村はガジャマダ大学に支援されて1999年からPEを15頭飼育し始めた。ところが一年後にムラピ山の噴火が起こり、住民がすべて避難して数カ月間のキャンプ生活を送ったために家畜は全滅した。

しかし農民たちは既に得た一年間の体験から、ヤギ飼育のメリットを高く評価したのである。かれらは機会があると、ヤギが欲しいと行政に陳情した。2012年になって、県庁はメスヤギ40頭とオスヤギ5頭を村への援助として与えた。4年間でヤギは2百頭近くまで増加している。[続く]

「インドネシアのヤギたち(3)」(2021年08月31日)

ヤギから取れるミルクの量は乳牛から得られるミルク量より小さいものの、売上高は遜色がない。村民がヤギに向けている期待は牛よりもはるかに大きいものがある。県行政もヤギの頭数を増やして畜産活動をもっと振興させる方針を立てている。

スレマン県の4千頭のヤギから得られるミルク量は3千リッターで、乳牛5千頭による6千トンのミルクには劣っている。しかしヤギ乳の単価は牛乳より高く、ヤギ乳を増やせば大きな経済効果が得られる。県がヤギ飼育の振興を政策の上位に置くのも自然なことだろう。

中部ジャワ州プルウォルジョ県ではPEヤギの市が開かれる。売り手はほとんどが県内と近辺のワテス県やクロンプロゴ県の畜産農家で、買い手は中部ジャワのパティやトゥガル、東ジャワのトゥルンガゲン、ラモ〜ガン、マドゥラ、更にはジャワ島外のメダンやランポン、そしてバリ島からもやって来る。マレーシアや台湾からバイヤーが来ることも珍しくない。

実は、インドネシア行政はヤギの輸入を認めていない。ヤギの市場価格が安定しているのは、その面に負うところが大きいと言えよう。国内の需給が国産品の供給過多なのだから、為政者にとって輸入の必要性など存在しないのである。そうして国内産業界には輸出の振興を呼び掛けているわけだが、優良なヤギは国内に置いておき、品質の劣るヤギを輸出せよ、というのが行政の指導している方針だ。

ヤギの品質はA・B・C・Dに区分されている。プルウォレジョ県令決定書によれば、A級ヤギの売買譲渡はその村の中でのみ認められる。そのヤギが村の外へ譲られたら違法行為になるのである。B級は同一郡内、C級は同一県内、D級だけが県外へ運び出すことを認められている。だから海港や空港に運び出されてよいのはD級だけということになっている。

しかし農民が政府から給料をもらってヤギを飼育しているのではないのだ。農民が高品質のヤギを作る努力を払うのは、それが高い商業価値を持つからである。もっとも高い商業価値を持つ作品を作ったのに、それを一番低い経済環境の中でしか売買してはならないと強制するのは悪法だろう。悪法を足蹴にするのは植民地時代から培われて来た庶民の反抗精神の表われにちがいない。

市にはすべての等級のヤギが集まって来る。順法精神の横溢する国民性であれば、D級とせいぜいC級くらいしか市に集まらないだろうし、そんなところに外国からバイヤーがやってくるはずもあるまい。

ところが現実には外国バイヤーがやってきてA級ヤギを安く買い、飛行機に積んで帰国して行くのだ。それがつつがなく行われるよう、業界関係者が支援する。ヤギを積んだトラックが県境のチ

エックポイントを通過する時、ヤギの等級を尋ねられるが、関係者がD級だと保証することでスムーズに空港への道をたどることができる。

マレーシアからヤギ1千頭とか2千頭のオーダーもときどき入ることがある。業界者は村々を回ってその数を集める。数を集めるためには等級のことなど言っていない。そこにA級やB級が混じったなら、それに応じた価格で買い手に金を払ってもらえばいいだけの話になるのである。

[続く]

「インドネシアのヤギたち(終)」(2021年09月02日)

ランプンでは、PEとオーストラリアから輸入されたボア boer 種を交配させて新種が作られた。その試みは1986年に北スマトラ州、1989年に南スラウェシ州で行われて失敗しており、2008年のランプン州が初の成功例になった。サブライ saburai と名付けられたこの種はその後着々と頭数を増やして順調に発展している。



サブライの毛色はたいてい白で、ところどころに茶色の部分が混じる。角は耳の後ろに曲がり、耳は長く垂れている。体高はオスが65センチ前後、メスは55センチ前後といったところだ。

今のところ、サブライの供給はランプン州が一手に引き受けており、廉くない価格で売買されている。「だいたい東ジャワからの注文が多いが、かれらはサブライと呼ばずにクロスボア cross boer と呼んでいるので、正式名を呼んで欲しいものだ。」とあるサブライ生産農家は不満を物語っている。

ヤギを使って競争させるゲームもインドネシアにある。東ジャワ州プロボリングやマドゥラでは、ヤギの走り競争が行われている。残念ながら、羊が行っている〜ガドゥンバはヤギには無理なようで、〜ガドゥカンビンという言葉がインドネシア人が口にしたとしても、その意味は〜ガドゥンバである



る可能性が高い。

マドゥラで有名な牛の走り競争はカラパンサピ karapan sapi と呼ばれていて、羊の走り競争はマドゥラでもプロボリングでもカラパンカンビン karapan kambing と言う。

プロボリングで行われているカラパンカンビンはマドゥラのカラパンサピのようなスタイルだ。2頭のヤギをくびきで繋ぎ、ヤギの間にくくりつけられた棒を引きずるような形で走らせる。カラパンサピの場合は牛の間のそりに人間が乗ってジョッキーを務めるが、ヤギの場合は後ろから人間がついて走る形式になり、



ヤギの猛烈なスピードに人間は追いかけるのがやっというあり様を見せている。

二組が競争して勝敗を決め、勝ち残り方式で決勝戦まで進む。チャンピオンには飼い主に賞品が与えられる。走り競争に向いているヤギは年齢が3カ月以上で子供を産んだことがなく、頭が小さく、身体はまっすぐで、前脚の付け根が太く、身体は前傾気味である者だそうだ。

ヤギを走らせるこの催しはマドゥラ島と東ジャワ北海岸部および南海岸部で遠い昔から行われていた伝統行事だったそうで、稲の収穫期・独立記念祝祭・村祭りなどの目玉行事として開催されるのが普通だった。

マドゥラのカラパンカンビンはプロボリングのものと違って、シングルススタイルで二頭だけが走る。それでも身体には左右に地面を引きずる棒が付けられる。選手はたいていがメスで、年齢は4カ月以上一歳半以下の出産経験のない者が出場する。オスが出場しないのは、集中力に欠けて

いるからだそうだ。つまり、オスは一心不乱にただ走ろうという気構えを持っていないということらしい。その心根を持つメスヤギは実に、マドゥラ女の特徴を如実に表している、とカラパンカンビン関係者のマドゥラ男たちは述べている。

マドゥラのヤギ飼育者はカラパン選手用のヤギを特別扱いして飼育する。まるでエリートそのもので、毎日餌とは別にジャムウと鶏卵が与えられ、住処は他のヤギと離されて、掃除の行き届いた小屋が用意される。そのようにして育てられたカラパンヤギの値段は、一般ヤギが100万ルピア程度だとすれば3千万ルピアの価値を持つ。それがチャンピオンにでもなれば、億の大台に乗るのである。ヤギたちはインドネシアの農民経済にとって重要な潤滑油の役割を務めている。[完]

「黒ヤギ、それとも黒ヒツジ？」(2021年09月03日)

ライター： 文司、ジャカルタ在住、レミ・シラド

ソース： 2001年12月1日付けコンパス紙 “Kambing Hitam”

インドネシア語には、先進文化諸国の外国語を話すひとびとがもたらした特定の教訓モデル、特に倫理に関わる類推的發展形態に由来する言葉がたくさんある。注目に値するその一例が kambing hitam である。

自己の潔白を主張するために過誤を誰かに押し付けるという語義を含んでいる言葉だ。興味深いのは、その言葉を持つインドネシア人が黒カンビン¹を作り出すことにきわめて長けているという点にある。

この言葉自体はそれほど古いものでない。1619年に既に存在していたオランダ語訳の書物にもとづいてライデカー Leijdecker が高等ムラユ語に翻訳した、ヘブライの書物トラ Torah の記述の解説として生まれたものである。生贄のカンビンに関連付けられる黒カンビンは西洋諸語の翻訳の中で通常 Leviticus と呼ばれているトラ第三巻の中のハルン Harun の話に関連して登場する。ハルンは二頭のカンビンをくじ引きして一頭は神、もう一頭はアザゼル azazel のために生贄にするよう命じられた男だ。

概して西洋語はどれも、フランス語とスペイン語を除いて、ヘブライ語のアザゼルを過誤や邪悪に関連する概念に翻訳している。特にインドネシア語への類推的發展に最大の影響を与えた、オランダ連邦共和国頭領の下に国家シノディ synodi として作られたオランダ語訳にはこう書かれて

¹ 編者のパレスチナでの体験からいえることは、羊は普通は白色であり汚れているために、飼育している砂漠の砂の色の薄茶とあまり見分けがつかないが、黒い毛の羊は遠くからよく見える。ヨルダン川の両岸では平坦地の砂地に深く切れ込んだワディがあり、それを羊飼いは羊を負いながらいくつも横断する。だから平坦地に取り残された羊は the lost sheep となり、ハイエナの餌になってしまう。何も遮るものがない平地だから、取り残された羊のメーメーなく声は数キロにわたって聞こえる。だから聖書ではこれを比喩に使っているのだろう。

黒ヤギ、それとも黒ヒツジ？

いる。

Aaron zal de loten over die twee bokken werpen: een lot voor den Heere, en een lot voor den weggaande bok.

ヘブライ語アザゼルの訳語に使われたオランダ語 *weggaande bok* を語義通りに訳すなら、去った、あるいはなくなったカンビンという意味になる。オランダ語の *bok* あるいは *bokken* はカンビンの意味だが、過誤や愚かさの意味をも持っている。インドネシア人はオランダ語のその意味を取り込み、発展させたのだ。

ジェームズ王版と言われている1611年に出版された英語訳では、アザゼルは *scape-goat* と書かれている。

Aaron shall cast lots upon the two goats: one for the Lord and the other lot for the scape-goat.

エコルズ＝シャディリの英語インドネシア語辞典で *scape-goat* の語義は *sebab kesalahan* または *korban* となっている。

その点に言及するなら、アザゼルの英語訳も独特な意義を解説する倫理理論上に生まれた類推に関連していると言うことができよう。*scape-goat* は本当のところ、ベーコンがアメリカナ百科事典で述べているように、アザゼルのためのカンビン以上のものであり、もちろん黒色が普通なのである。

とはいえアザゼルの語義について、西洋諸語を通して満足できる理解に達しようと努めても、うまく行くものではない。古代セム語族一般、特にヘブライの伝統的宗教倫理に関する慣習の中にあつた観念が、その当時は異教徒だった西洋人の持つ観念で容易に解き明かせるものではないのだ。そのために、このペリコープに対するフランス語やスペイン語の翻訳はより妥当に見える。フランス語はこれ。

Aaron jettera le sort sur les deux boucs, un sort pour l'Eternel et un sort pour Azazel.

スペイン語はこれ。

Y echara suertes Aaron sobre los dos machos cabrios, una suerte por Jehova, y otra suerte por Azazel.

この過誤の犠牲と類推されるアザゼルとは、本当は何、あるいは誰なのか？ 図解聖書辞典の中でイーストンは「一部のひとは悪霊あるいは悪魔と考えている」と述べている。ところがディヴィッソンは A Dictionary of Angels の中で「罪に堕ちた2百人の天使のリーダーのひとり」と書いている。

kambing hitam の語がオランダ宣教団学校のムラユ語教育の中で最初に使われたのは19世紀のマルクだった。ヨセフ・カムはそこでの著名な教師のひとりだった。最初かれはスマランで働き、その後アンボンで預言者のように敬虔派方式でムラユ語を教えた。